

ICHI no UNCHIKU

倭城探訪の旅-4 (蔚山にて)

蔚山(ウルサン)にいる。釜山の西北約60*に位置する。人口は約108万人、なんと言っても現代(HYUNDAI:ヒュンダイ)自動車や現代重工業などの工業都市で、現代グループの総本山である。徹底した企業城下町で、日本と言えば豊田市であろうが都市規模が違う。日本では相当する都市がないかもしれない。

我々は最高級ホテルのロッセホテル蔚山の脇にある場末のビジネスホテルに泊まった。夕食はもちろん朝食すらでない。でもミセス・キムさんのはからいでドロドロになったパンツは洗ってもらえた。ただでやらしただが、聞くところによって「平気 平気」。達者なものではないか。

いやー、昨夜食事をするため繁華街を回って、ふっと思ったことがある。韓国の言語のことである。かつて読み書きは漢字を使用していたが、いまは李朝時代の1443年に世宗国王が発明したハングル表記が主流となっている。街中はハングル文字があふれかえっているが、一つとして読めないことである。思わず立ち止まってしまった。中国では漢字を読めなくても想像をすることはできる。がしかしハングルばかりは全く読めないし意味もわからない。立ち止まってははいられない。ミセス・キムとはぐれてはならない。どうも他の人たちが偶然そう思ったようで、いつのまにかミセス・キムを取り囲むように歩き回っていたのが我ながら可笑しかった。それにしてもコーヒーがえらく高い。一杯700円もする。ミセス・キムのおっしゃりようでは、韓国では贅沢品なんだそうで。なぜか。皆さんどう思います。

ところで今回の日程を整理しておこう。蔚山付近では、加藤清正が籠城した蔚山倭城、同じく清正築城の西生浦倭城、前回紹介した黒田長政の機張竹城里倭城など、釜山より西方では、熊川安骨倭城、小西行長籠城・島津義弘救出の順天倭城など7~8カ所見学する。釜山倭城のように市街化の進展にともなって跡形もなくなった倭城もあるが、予定の城跡は概して遺構の保存状態が良いようである。帰路は釜山からKTX(韓国高速鉄道)で時速300*で北上し、ソウル近郊の世界文化遺産、水原華城を見学し、仁川国際空港から関西空港に飛び立つ予定である。

さて、翌日は先ず市内に遺る蔚山倭城に向かう。蔚山湾から太和江を少しばかり遡った丘陵にある。今は鶴城公園として多くの市民の憩いの場となっている。城跡としては改変著しくわずかに石垣が残る。慶長の役に際し加藤清正によって築かれた倭城であるが、築城途中であったうえに、兵糧の蓄えもなかった。明・朝鮮連合軍四万三千の兵に包囲された。急報を受けた清正は、わずかな手兵を引き連れて西生浦城から船で蔚山城に入った。



蔚山倭城から対馬方向

飲まず食わずの十五日余りの籠城戦のすえ、毛利秀元を大将とする救援軍によって救出された。秀吉の死により豊臣軍は朝鮮半島から撤退するが、清正・幸長にとってこのことが石田三成との対立を一層深めたようである。

西生浦倭城は倭城の中でも最大規模で、典型的な日本式の城の形態をしている。築城は1593年加藤清正の指揮のもとで行われ、現在も往時を偲ばせる本丸跡をはじめとする城壁がほぼ遺っている。清正はこの経験を踏まえ関ヶ原の戦い以後熊本城の本格的築城を開始していることは、二つの城跡の築城技術を比較すれば明白である。

特にこの倭城では、山上部と山腹・山麓部を結ぶように築かれた登石垣が著名である。慶長の役後に築かれた彦根城(滋賀県彦根市)、洲本城(兵庫県洲本市)、松山城(愛媛県松山市)などに登石垣が築かれているが、倭城での築城経験が採用されたものであろう。



西生浦倭城天守台



西生浦倭城登石垣

by 市村 銑治



2007/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1166

石川県金沢市上若松町23番地

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2007/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

謹賀新年

睦月



最近、各地域のまりづくりには様々な形で携わることが多くなってきた。「〇〇市中心市街地活性化計画」の策定、「〇〇駅周辺整備計画」の策定、「〇〇による交流人口拡大策」の検討など、対象とする内容は様々であるが、いずれもその地域の地域特性を活かした計画案の策定・立案が求められることが多い。しかも、そのような計画案の検討において、よく言われるのが「〇〇らしさ」を計画案に取り込められないか、という要求である。

「〇〇らしさ」を計画案に取り込むためには、「〇〇らしさ」を構成する要素を分析し、その地域の魅力を引き出す工夫や仕掛けを計画案に取り入れることが必要となる。しかし、「〇〇らしさ」を表現することは、一見簡単そうに思えるが、非常に難しいことが多い。なぜなら、「〇〇らしさ」を取り込む目的は、「〇〇らしさ」を取り入れることによって、競合する他の地域との差別化を進め、その地域の魅力をさらに増進することが狙いにあるからである。では、「〇〇らしさ」とは、いったい何なのであろうか。

最近、地域のブランド化を進める動きが各地で盛んである。特許庁が昨年4月から始めた「地域団体商標制度」もその一つであろう。また、「〇〇検定」の実施や「〇〇ナンバー」登録もその一環である。(株)ブランド総合研究所が実施した「地域ブランド調査2006」(市版)に興味深い結果が示されている。全

国779市を対象に行った魅力度調査結果を46道府県庁所

在都市(東京都を除く46道府県)の魅力度ランキング別に整理し、都市の知名度(認知度)ランキングとの関係进行分析したものである。インターネットに掲載されているデータを基に回帰分析すると両者には、^{0.7}以上の相関関係が認められ、また情報発信の程度(情報接触度：過去1年間)との関係を分析すると^{0.8}以上の相関関係があることが明らかとなった。都市の魅力度をアップするには、その知名度を上げることが重要であり、そのためには魅力度発信のための情報提供(情報発信)が必要不可欠(重要)である。すなわち、地域のブランド化を進め、他にはないその地域の個性を磨くことにより、地域ブランド力を高める施策が重要になることが明らかになったわけである。

金沢市の魅力度は、現在全国12位(道府県庁所在都市の中では7位)に位置づけているが、情報接触度ランキングでは22位である。これまでの遺産に胡坐をかいていると過去の栄光から転がり落ちることになるかもしれない。今以上に、更なる努力が必要になるのではないかと、自分自身、戒めな



【プロフィール】
高山純一(たかやま じゅんいち)
金沢市出身⁵²歳
金沢大学大学院自然科学研究科教授、工学博士
専門：交通計画・交通工学・都

濱のいびきと『責任』

思春期の頃、事あるごとに「責任感が無い」と母から叱責されていた。そのためか、いつしか責任感とは何なのか、自問する癖がついていた。

世の中のいろいろな処で問題が起こっている。糾弾されると直ちに「責任をとって」辞任する、あるいは「世間を名乗る周囲」が「引責辞任」を求めるのが当然のようになっていく。

責任を果たすとは、どういうことか。

事が起こって直ちに辞めてしまえば、当人は逆に楽になつてしまふのではないのだろうか？本来、責任を果たすべき者が、さっさと辞めることで「潔い」などと賛美されるのは、かなり奇異である。まして、その選択で問題解決の修羅場から解放されて気が楽になるのは、ますます奇怪である。「責任を取る」と言って職を辞した人は「このような責任をどう取った」というのであろうか。皆目理解できない。さっさと身を引く姿に、自らの無能・無策を自責する意識が隠されているというのか。

「責任」とは、果たすことを期待されている職務を全うすることであり、やるべきことをやり遂げることではないのか。

その責務を果たす期待は、では誰からもたらされているのか。自ら進んで果たすことを誓い、周囲からの期待を進んで引き受けることなのかもしれない。であるならば責任を果たす意識・行為は平常の中にこそあり、その

中に自らの生き方の価値を掛け、それを表現する機会なのではあるまいか。

事を起して辞めるのは「責任をとった」からではなく、「責任を果たす能力が無いから退場させられた」と評すべきはずだ。

先日再放送されたNHK『プロフェッショナル・仕事の流儀』(F.L.I.P.No.26)。各地の病院で手術不能と診断された患者が最後の望みを託す脳外科医が居る。彼は「患者は命を掛けて医者を信ずる。ならば執刀にも自らの医師生命も掛けるべきではないか」と困難な手術に向かう。患者を安心させる語り口に、弁護士から訴訟を招く危険性の指摘を受けても「プロはやるしかない。やりきるしか道は無い。医者が逃げることは患者が死ぬこと。逃げることは許されない」と言い切つて動じない。年間³⁰⁰の手術に向かい、睡眠時間は4時間。先進例のビデオを観、患者からの手紙・メールにも目を通し応える日々の連続……

期待される困難な責務を全うするためには、人知を超えた運も影響する。異例の出世を重ねた父は、よく「運も実力のうち」と信心を重ねたという。高額納税者番付十位内に十年以上入り続け、生涯累積納税額日本一となった斎藤ひとり氏は、「ツイている人はツキを呼ぶ」と語る。良運やツキを呼び込める人とはどのようなひとなのか。これも平常の中にこそ隠されている。

中途半端な正義感や価値尺度だけで、大事を見誤つてはならぬ、と思う。

『自己分析とやりたいことを明確にする事の畏』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

大学の後期試験が今月末から来月初旬には終わる。そうするといよいよ大学生の就職活動シーズンが始まる。昨年以上に大卒採用を拡大する企業が増えると思われるので、今年の新卒採用戦線は、苦戦する企業が続出すると思われる。去年辺りから新卒採用戦線は、買い手市場から売り手市場に変わってしまった。

最近の大学生は、就職活動に臨むにあたって自己分析とやらをしないとイケないらしい。書店に行けば、自己分析の手引書が山と積まれている。自己分析とは、「何故働くのか」を自分なりに考え、自分が何に向いていて、何を目標として働けばいいのかについて、明確な答えを持つことのようなのだ。

私はこの自己分析、正確に言うと上記の下線部分について、違和感を覚える。果たして二十歳そこそこの現代の若者が、こんな大きな問いに対して、明確な答えをもてるのだろうか？と。持てる人はいいけど、持てない人の方が多いんじゃないだろうか？

正直言って20数年前の私は持っていなかった。今だって、あなたは明確な答えを持っているのか？と問われると、言葉に詰まってしまう。そもそも職業経験のない大学生が、自分がどんな職業に向いているかなど考えられるのだろうか？ そんなもん、働いてみないと分からないよ、というのが本当のところだと思っただけ、いかがだろうか？売り手市場とは言え、就職活動に苦勞している大学生は結構な数で存在している。彼ら彼女らは、一様に自分が何に向いているのかが分からなくなつて……と悩んでいる。

企業の採用担当者は学生に聞く、「あなたは我が社に入つて何をやりたいのですか？」と。この問いに対して、いったいどんな答えが返ってくることを期待しているのだろうか？ 自社の仕事の中身や、事業展開、経営方針をしっかりと伝えないで、こんな問いを発している企業が多いし、伝えたとこで、大学生が考えるものと、現実とのギャップはかなり大きいはずだ。

大学の就職指導課では、相変わらず自己分析の重要性を伝えている。でも、こんなもので自分自身が分かるのなら、誰も苦勞しないはずだ。自分が何者であるかは、あるタイミングの中で、人から言われて初めて確信が持てるものだ。本を読んでシコシコやっても、分からないと思うよ、実際は。

かくして迷えるまま社会に飛び出す若者が増えていく。就職は決まったけど、果たして本当にこの会社が自分に向いていて、自分のやりたいことができるのだろうか？と。自分が何をやりたいのかを明確にしないとイケない。そして、そのことができる会社を選ばないとイケない。これは、ある意味強迫観念といえないだろうか？

はっきり言おう、世の大人の大半は、そんな大それた目標を持っていないし、自分を分かっている訳じゃないと。でも、そんな状態でも人生は捨てたもんじゃないし、自分なりの努力をしていけば、それなりに幸せになれるものなんだと。



『温泉への誘い(46) — 関西の温泉 —』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

『恐ろしい未来予想図』

ナチュラルコンサルタント(株)

第1都市計画部 木内 誠

小生は石川高専の卒業生である。とはいえ、五年制学校を六年で卒業しているので大きな声では言えない。

全国の高専には入試倍率が10倍近い難関校もある。石川高専の上級学科は3~4倍で推移しているが、旧土木系学科の倍率は低下している。今年では過去最低1.1倍であった。

少子化や反公共事業に伴う業界の低迷はやむを得ない。だが同時に学力低下と学科間の格差拡大という問題が生じている。

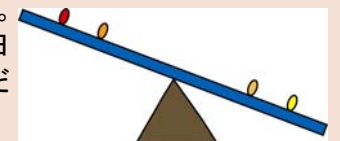
高専入試の際には第一志望と第二志望の学科を記載するため、下級学科には第一志望落ちの優秀学生と、もとより第一志望で下級学科に入学した学生が混在する。同じ授業を受けても個々の理解度に大きな開きがあり、格差拡大に拍車をかけている。

独立行政法人化のなかで高専も厳しい運営を強いられている。文科省の定める目標に達しない高専は運営交付金を削減される。厳しいノルマは過酷な履修圧縮となり、学生と教官を圧迫する。15年前の1時限は50分であったが、現在は100分である。

授業に対応できる学生とできない学生の二極化が始まっている。社会においても勝ち組・負け組の二極化は強まるばかり。このままでは階級化社会になるのではないか。

現代、生まれながらに格差があることはあまりないが、やがて負け組の家庭ではゆとりある、豊かな人格形成教育が難しくなり、生まれながらに勝ち組、負け組という構図が確立される可能性を否定できるだろうか。

話題沸騰の映画「硫黄島からの手紙」。この凄惨な戦争は他人事でも絵空事でもない。たった60年前の我が国の現実である。我々が老人になるころ日本はどうなっているのだろうか。



by M.Z

【ダーティハリーからの贈り物
「硫黄島からの手紙」】

先週の土曜、クリントン・イーストウッド監督の「硫黄島からの手紙」を観てきました。もう既に観られた方も多いと思いますが、とにかく驚かされ、圧倒されました。

まず最初のタイトルが日本語で出てきたのに驚き、日本人俳優のセリフもすべて日本語（米国人との会話シーンを除いて）全くの日本映画と言ってもいい程なのです。またこれまでの米国映画に多々あった日本や日本人に関する描写の不自然な部分はほとんどなく、このことだけを見ても、イーストウッド監督のこの激戦で命を亡くした兵士達への敬意と、彼らの存在をより強く我々日本人に伝えようという意思が並々ならぬものであることが伝わってきました。この映画は前編モノトーンに近い色彩の彩度を落とした映像で淡々と硫黄島防衛に携わる日本軍の状況と、登場人物にまつわる生活やエピソードを描いていくのですが、その一場面、一場面の内面の精神描写が、まるで見ている自分がその現場に居るような錯覚を覚えるほどのリアルさで描かれています。パン屋の西郷が身重の妻『花子』と談話している時に、タスキを掛けた婦人会の女性が突然「おめでとうございます。召集令状です。」と訪れるシーン。このシーンではあたかも観客の自分自身が召集令状を受けたかのごとく「ビクッ」としてしまいました。またこの西郷役の二宮和也さんの熱演がすばらしく、栗林中将役の渡辺謙さんと対になり、最高司令官と一兵卒という異なる立場であるにもかかわらず、『死を覚悟した戦場』の中でしだいに共感していく。その過程が見事に描写されていました。イーストウッド監督は二宮さん扮する西郷役を61年前の日本と現在の日本の橋渡し役として、特に若い人たちへの『通訳』的役柄として、かなり重要視したのではないかと思います。この映画は戦争映画ですからもちろん戦闘シーンや悲惨な自決シーンもあります。しかしそれらが驚くほど『淡々』と描かれているのです。変に美化したり誇張したりすることなく、日米どちらにもつかず、妙なイデオロギーが入る余地がないほど『淡々』としているのです。しかしこの『淡々』さが見終わった時にズシと圧倒的な説得力で胸に重く残っているのです。リアルさと『淡々』さ、この一見矛盾する表現を一言で表すと、「正直さ」とでも言うのでしょうか、そう、この映画は「可能な限り正直に創った戦争映画」だと思えます。

76歳のイーストウッド監督が心を込めて、日本人では創れなかった日本人の為のハリウッド映画を硫黄島で戦った日米の英霊と現代の日本人にプレゼントする。このたぐい稀な愛情のこもった贈り物に感謝するとともに、61年前に亡くなられた英霊の方々に偲び、感謝申し上げます。



第四十九章 任徳（にんとく）

聖人無常心。以百姓心為心、善者若吾善之、不善者吾亦善之。徳善。信者吾信之、不信者吾輩亦信之。徳信。聖人在天下、じゅつじゅつ為天下渾其心。百姓皆注其耳目、聖人皆孫之。

地域住民との懇談会、学生とのワークショップなど一般の人々？と交流する機会があります。

20、30人と集まるわけですから、様々な意見が飛び出しますが、利己的な意見や脱力的な意見が出されると予想していると、前向きな意見が大部分を占め、ガッカリするようなことが今まであまりありません。

ワークショップに参加する人々自体の意識が一般的ではないのかもしれませんが、それでも「日本もまだまだ大丈夫」という大げさな気分になさせてくれます。

10年ほど前のワークショップでは、結構行政サイドの意見で作りあげたプランを基本に、住民の意見を聞くだけ聞いて、「参考にさせていただけます」と口だけの場合が多かったような気もしますが、最近は意見を取り入れたプランを作成するものに変化しています。

当然といえば当然ですが、ワークショップに参加者が慣れたせいもあるかもしれません。

ワークショップはゲーム感覚で問題解消、新規提案、意見調整を行うので、参加者はどちらかというとなし無責任な側面も顔を出しますが、童心に戻って「遊び」という損得を基本にした策略の少ない本性が発揮される場であるとも言えます。

この意味で、老子が言う「人間の心は本来誠実」は真実なのかもしれません。

ゲームにはルールがあります。ワークショップでは、何等かの方法でリーダーや書記を選び、他のメンバーの意見を取りまとめ、一つの「案」にした



てていきます。参加者それぞれに「案」の提出を依頼しても、あまり良い結果にならないのは、「遊び」にならないためでしょう。

学生10名×3チームにワークショップを開催したことがあります。いくつかの方法をとったのですが、中でも結構参加者がおもしろがったのは、下記のようなものです。

【ワークショップの目的】特定の地区を対象とした今後必要な施設

※この目的は隠しています。

【STEP1】当該地区周辺に住んでいると仮定し、10歳年齢階層別・平休日別・3時間帯別に「どこで」「誰と」「何をしている」かについて参加者全員に紙に書いてもらう。

【STEP2】チーム毎に書いた紙をもとにして、「A氏の一生」を性格や職業なども含めて想定してもらう。

【STEP3】A氏のライフステージをそれぞれの段階で豊かにしていくために必要な施設は何なのかを想像してもらう。

STEP1では集中力を持続させ緊張した時間で疲労するのですが、STEP2ではリラックスしながら遊べます。そしてSTEP3で初めてワークショップの目的を明かすのですが、全体として長時間（6時間）なのですが、リズム感があって良い印象だったように思えます。

あまり一般向きではないかもしれませんが、機会があったら試してみるのも良いと思います。

by shio